

大学院博士後期課程開設記念シンポジウム

日本語日本文学研究の未来 —— 博士課程の目指すもの ——

平成二〇年三月一日(土) 熊本県立大学大講義室

■ 第一部 研究の醍醐味

■ 第二部 博士課程の使命と課題

コーディネーター

半藤 英明 (熊本県立大学大学院文学研究科長)

パネリスト

揖斐 高 (成蹊大学教授)

近藤 泰弘 (青山学院大学教授)

鈴木 元 (熊本県立大学文学部教授)

山田 俊 (熊本県立大学文学部教授)

川平 敏文 (熊本県立大学文学部准教授)



近藤 泰弘



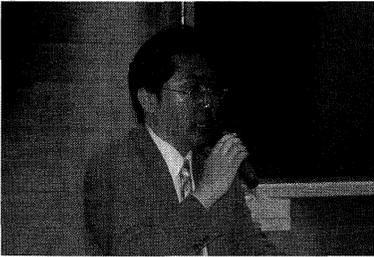
揖斐 高



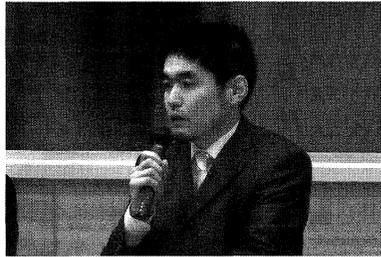
山田 俊



鈴木 元



半藤 英明



川平 敏文



## ■第一部 「研究の醍醐味」

○半藤 ご来場いただきました皆さん、誠にありがとうございます。会場を見回しますと、幅広い年齢の方にお越しただいております。院生、学生、あるいは同窓会の方々、学校の国語科の先生、地域の方、授業公開講座の受講生の方など、たくさんお越しいただきました。このことは日本語日本文学分野に関心を持つ支持層が一定数あることを示しているものと思われまます。

早速シンポジウムに入りますが、まず、シンポジウムの狙いを簡単に確認したいと思います。「国家の品格」という本が売れました。藤原正彦氏のベストセラーであります。藤原氏が「これからの日本に必要なものは教養である」というようなことを言っております。「教養」とは何かと考えますと、日本語日本文学の知識は教養の一つ、日本人にとつての教養の代表とも言えると思います。そうであれば、その価値を伝えていくにはどうしたらいいのか。誰が伝えていくのかということになります。これは私も、その分野の研究に携わっている者たちではないかと思うわけです。この第一回は「研究の醍醐味」ということで銘打ちましたけれども、日本語日本文学はこんなにも面白い、あるいは意義深い、また、私たちの大切な教養なのである、というようなことを、あぶりだしていきたいと思えます。

まずは自己紹介を兼ねるかたちで、パネラーの方々の現在のご興味、あるいは専門とされる研究内容、今後取り組みたいテーマ、そのあたりからお話しただきたいと思えます。

○揖斐 東京の成蹊大学というところから来ました、揖斐と申します。

私の専門はいわゆる近世文学ということですが、中でも近世後期の日本の漢文学を中心にやっていて、あと近世の和歌

や俳諧を少々という、そういうところが専門になっております。

研究領域からいうと、例えば『源氏物語』の研究をしていますとか、あるいは『新古今和歌集』の勉強をしていますと言うと、日本文学研究の王道を行っているようで、なかなか幅が利くんですけれども、どうも私がやっているのは、日本文学研究の脇道、裏道というところかもしれないのですが、そのあたりから日本文学を見ようという研究をしております。

これからいろいろな問題でお話しすることになると思いますが、私はちょっと遅めで、二五歳ぐらいのときに、やっと日本文学の研究をしようかなと思つた人間です。私が大学院に入ったところというのは、ちょうど大学紛争の時代でして、そのことも後ほど触れるかもしれませんが、あまり勉強せずに大学を卒業して、大学院に入ってしまったという世代の人間であります。

それで、研究をするときに何が刺激になつたか、影響を受けたかといえますと、いわゆる大学というアカデミズムの中での研究というよりも、ちょうどその当時、森銑三さんという方がいらして、その方の著作集、『森銑三著作集』というのですが、全一三巻がちょうど刊行されている途中で、刊行されたものを一冊ずつ買いながら読んでいって、そのいわゆるアカデミックではない在野の研究の在り方に影響を受けて、そのくせ大学院に行つて勉強したという、ちょっとねじれてはいますけれども、そういうかたちで研究を始めた人間です。よろしく願ひします。

○近藤　こんにちは。私は東京の青山学院大学というところからまいりました。

専門としておりますのは、平安時代から現代文まで広くやっておりますけれども、文法研究というものをしております。こちらの半藤先生と同じ志を持つ者ということで、今日はお招きをいただきました。本当にありがとうございます。

実は私がやっていることは、文系といひましても、ちょっと特殊かもしれないですけれども、コンピュータを使って文

法研究をするというのが私の分野です。これは学部時代から実は何とかコンピュータで日本語研究ができないかと思っていたのですが、私が学部のところは大型コンピュータというのがやっと思えるようになった時代で、そのころコンピュータは片仮名しか読めなかったのですね。今から考えると信じられないですが、パソコンはまだありませんでした。ですから、何とかやりたいなと思ったのですが、学部時代は駄目で、卒業論文はまだ全部手でやっていました。

だんだんとコンピュータが進んできて、大学院を終わるころになって、ようやくパソコンで漢字が使えるようになりまして、そのころから本格的に自分が持っているデータ、例えば『伊勢物語』だとか『竹取物語』を、最初はしこしここと手でコンピュータに打ち込みまして、それを使って、その中の例えば助詞なら助詞一つを取り出して、そのまわりにどんな言葉があるかをコンピュータで打ち出していくと、ということを始めて、それからずっと今に至るまで、そういうことを使いながら日本語を調べるといって研究をしております。

今日の資料に書きました、『コーパスに基づく言語研究』という本を共同でつくったのですけれども、このコーパスとというのがそういう意味でして、日本語をコンピュータで扱えるかたちで電子計算機、つまりコンピュータですね。コンピュータに入れて、ネットワーク上において、それを「index」とか、あるいは「MacOS X」といったものを使って主に研究しております。そういうコンピュータの上でさまざまな処理を使って研究をしております。

細かいことについては、またお話しします。以上です。

○半藤 本学の鈴木先生は、このところは熊本ゆかりの文学素材なども取り上げてご研究ですが。

○鈴木 鈴木でございます。当面したところの私の関心ということで、ごあいさつしたいと思います。

当初、まったく偶然だったのですけれども、卒業論文で細川幽齋を扱ったことがありまして、この地へやってまいりまして、水前寺公園に古今伝授の間があるという、そのゆかりの史跡があるというのを初めて知って、そのところからいろんな興味広がってきたわけです。スタートとしましたのが、連歌という文芸形態の研究だったわけで、当初、連歌をやるためには、あらゆることを知らなければいけないと真剣に思い悩んで、あらゆるところに関心の手を伸ばしながら探索の手を広げていきました。その中から、現在の文学研究というのは、どちらかというと非常にたこつば型の専門化した研究が進みつつあるわけですが、むしろ、そういう垣根を取り払うところにどういう面白さが出てくるのか、そんなところに関心を抱きながら、現在の研究を進めているところです。

また詳しいところについては、後ほど触れたいと思います。

○半藤 鈴木先生は、尊敬する学者の方がどなたかおられるでしょうか。

○鈴木 それは当然おりますけれども。月並みではあります。私を研究の道に導いてくださった師匠ですけれども、師匠に対しては心からの敬意と、敬意というよりも畏敬の念を抱いております。それ以外にも、これまでの研究者の中で何人か畏敬すべき研究者は当然ながらおります。

○半藤 模範的回答でした。「おれ自身をおいてなし」と言われたら、どうしようかなと思われました。続きまして、山田先生です。山田先生は、博士課程では日中文化のご担当ということで、中国とのかかわりを研究されますが。

○山田 文学部の山田です。よろしくお願いたします。

私は今日のこのメンバーの中で、唯一日本以外のことを専門にしているのですが、中国の思想と宗教を主なテーマとして研究しております。俗に儒教と仏教と道教の三つ合わせて三教という言い方をしますが、三教のかかわりが主なテーマです。

時代的には、六朝時代という言い方をしますけれども、唐以前ですね。六朝時代は仏教、道教を中心に、思想を研究しています。宋代以降になると、今度は朱子学とかかわりがどうなってくるのかなという、そういった流れでこのころ本を読んでいます。特に最近では南宋の朱子学が盛んになる直前の老子とか荘子ですね。そういった道家思想がどのように受け入れられていたのかというあたりに関心があります。そのあたりの研究を進めています。道教自体はちょっと微妙ですが、こういった思想・宗教というのは、かなり早い段階から日本にも入って影響を与えていますので、そういった点で日本と中国の比較ということになるわけです。

現在、特に中国の中国思想・中国文学も含めてですが、中国研究というのはここ五、六年ぐらい、非常に大きく変わってきています。皆さんご存じだと思いますが、中国には膨大な文献があるのですが、かなりの部分がデジタル化されているので、今や漢文が全く読めなくても、パソコンが使えればかなりの文献を、中国の文献であればもれなく検索することができますですね。以前はそれができませんでしたから、本棚の本を左から順番に読み倒していかないと探している言葉が見つからないという状況だったのですが、最近はずいぶんと研究の仕方、勉強の仕方が変わってきました。

これは後で少し、詳しくお話しする機会があるかと思いますが、そういった中で、これからわれわれは何を勉強しているのか、何をどのように研究していったらいいのかと、非常に過渡的な状況にあるのではないかと思います。以上です。

○半藤 本日のパネラーの並びでは一番若い川平先生は、『徒然草』の受容史、『徒然草』が後世にどのような受け入れられてきたか、そういうあたりがご専門です。

○川平 川平でございます。先ほど揖斐先生が江戸時代とおっしゃいましたけれども、私も江戸時代が専門です。ただ、今でこそ江戸時代の研究者という顔をしているわけですが、学部生のときまでは『徒然草』そのものを研究したいと思っていました。つまり、中世文学をやりたいと思っていました。たまたま卒業論で扱ったものが、江戸時代の『徒然草』の注釈書だったのです。現在でもいろんな古典の注釈がありますけれども、江戸時代人が『徒然草』をこう読むのだということを解説した本です。それを読んでおきますと、現代の解釈などとは非常に違う部分が出てまいりました。なぜ、こんな「読み」をするのだろうかという、今から考えればすごくおかしな「読み」がたくさんあるのです。そういうことに興味を持ちまして、今のような研究を進めているわけです。つまり、江戸時代人がどう読んだかというところを分析して、江戸時代のものと考え方とか価値観、そういうったものが抽出できるのではないかと考えたところで研究を進めているわけです。そういう古典の受容という問題、特に『徒然草』の受容ということが一応中心にあるわけですが、そこから少し派生をしまして、江戸時代における兼好法師の伝記のあり方にも関心が移りました。

江戸時代というのは非常に『徒然草』がよく読まれた時代であります。一種のブームになったのです。それ以前はさほど——もちろん古典ですから受け継がれて読まれてはきているのですが——江戸時代になって爆発的に読まれるようになります。これは出版文化の発達というのが非常に大きな要因としてあるわけですが、そのような江戸時代における『徒然草』ブームの中で、兼好法師の伝記に関しても、かなり注目されるようになる。

そこで現代だったら、きちんと学術的な手続きを経て、伝記というのは研究されていくのですが、江戸時代というのは、そういう手続きを踏まないところがありまして、かなりいいかげんに、まあこんなものだったのだろうというレベルの、偽の伝記ができるのです。それが一般に信じられて、かつそれにまた、いろんな人がいろんな伝記を勝手に付加していくという状況がありました。江戸時代人がどういう兼好像を与えたかというところから、江戸時代の人々の文学観なり、価値観なりを見つけることができるということもありまして、兼好の伝記の研究も『徒然草』の受容の問題と並行してやっております。

今は『徒然草』、あるいは兼好というところを中心に置きながら、広く江戸時代の学芸——学芸というのは思想を中心として、歴史とか芸術とかいろんなものが入りますけれども——その問題とかかわらせて、江戸時代の文学を読み解いていきたいというのが、一つ方向性としてあります。以上です。

○半藤 川平先生は『徒然草』に最初から関心があつて、そこから今のご研究に至るといった感じのようですが、『徒然草』のどういうところが面白くて、やってみようと思われたのでしょうか。『徒然草』のどこに面白さを感じたか、そのあたりはいかがですか。

○川平 あらためて考えると、なかなかその答えは見つけにくいのですが、漠然と中世という時代にあこがれていたようなところがあつたと思います。私は一応、文献としては『徒然草』を学部生のときに選んだのですが、なぜ中世にあこがれたかといいますと、いろんな本を読んでいたなかで、江戸時代というよりも、中世の民俗にすごく関心があつたのですね。ただ、うちの出身の大学には民俗学の講座というのがありませんでしたので、中世の「文学」でと考えたときに、と

りあえず『徒然草』をやろうというふうに、非常に安直に考えたのだと思います。

○半藤 世間に楽しいことがたくさんある中で『徒然草』にいくところに、学者としての素地があったということでしょうか。

さて、先生方から学問とのかかわりのお話をいただいたわけですが、この分野は誰でもが関心を持っている、誰でもが敬愛を抱いているというものでもないのではないかと。日本全国の大学で、国文科、日本文学科というものが姿を消し、実学的なイメージの学部に衣替えするということが増えております。鈴木先生に伺いますが、世間というものは、日本文学、それは研究であつても、あるいは小説を書く・読むなど、カルチャーであつてもかまわないのですが、そういうものをどう受け止めているとお考えでしょうか。

○鈴木 なかなか最初から難しい質問で答えに窮するのですが。まず一つ言えるのは、一概に日本文学日本語学研究とは何なのかということで、世間的に共通の認知がされているのかというと、私はそういうことではないだろうと思つています。

近所の飲み屋に行つて、ぐだぐだと飲みながら話したりしていると、「あなた、何を専門にしているんだ」と。「いや、日本の古典文学です」と答えますと、「古典文学って何なんだ」というレベルから、質問してきたご本人がいろいろと興味があつて、「『源氏物語』ですか、『万葉集』ですか」というかたちで話が出てくる場合もありますし、質問する人によつて、それぞれ大学における日本語あるいは日本文学に対するイメージというのが一様ではないと思つています。

おそらく今のご質問に合うのは、先ほど理事長のあいさつにもありましたように、大学において日本語日本文学の研究

に何の意味があるのかという疑問が非常に根強くあつて、それに対してどう考えているのかということなのかなと思うのですが、非常に大きな問題ですので一口で言うことはできませんけれども、われわれは単純にこれが日本文学の研究として、日本語学の研究として、こういう役に立つんだというような、短いスパンでの議論にのつて話をしては駄目だろうと思います。

ひとところよく言われていた、これは役に立たないもののだと、基本的に役に立つものではない学問なのだという言い方では、これからの説明はつかないだろうと思います。だからといって、医学や法学だとか、そういうレベルで、即座にそれが世の中の意味を持って見えるかたちのもの、これと同じ土俵での議論をしてはやはり駄目だろう。われわれはそういったものとは違ったレベルでの意味のある仕事をしているのだということを、なかなか見えにくい話だとは思いますが、われわれの研究の成果を還元して示していきながら、その間をこれから少し埋めていかなければいけないのかなと。少し逃げたような説明になつたかもしれませんが、そんなことを考えております。

○半藤 ありがとうございます。揖斐先生、われわれ大学教員は日々、自分の関心に基づいて、また専門に基づいて、その面白さや価値を伝えるべく大学で授業をしているのだらうと思えますが、長い研究、教育のご経験からいたしました、学生が日本語日本文学研究をどうとらえているかというところに、変化というものをお感じになりますか。

○揖斐 それは日本文学科の学生がということですか。

○半藤 そうですね。身近なところで結構かと思えます。

○揖斐 ほかの学部や、ほかの学科の学生が日本文学科の学生をどう見ているかということだと、ここにも日本文学科の学生さんがたくさんいらっしやるので申し訳ないのですが、何となくダサイとか、地味だとか、たぶんそのように見ているだろうと思います。

私の大学でも、卒業生で、アナウンサーの高島彩さんは法学部なのですね。小説家の小池真理子さんは美人ですが、英米文学科なのですね。じゃあ、日本文学科はどういう卒業生がいるかというと、どうもこのお二人に対抗できる人はいないかもしれません。

もう一つ、日本文学科の学生がどのように日本文学や日本語学を考えているかということですが、これはたぶん日本語学と日本文学ではかなり事情が違うだろうと思います。日本語学のほうは近藤先生がおっしゃると思いますので、私は文学のほうですけども、文学のほうも近現代文学と古典文学で、またこれはかなり違うかなという気がします。

私は江戸時代、近世の文学を教えていますので、その範囲で少しお話をしますと、日本文学科はどこでも卒業論文を四年生で書いて卒業することになっていると思いますが、私のところでは三年の終わりぐらいに、学生に「あなたはどのような卒業論文をやるつもりなの？」というので個人面接を毎年やるんですね。そうすると、大体二割ぐらいは「私はこれやりたいと思う」と具体的な作品名が出たりするのですが、あとの八割ぐらいは三年生の終わりになっても、「まだ何をやっていいかはつきり分かりません」と非常に曖昧とした状態であるような気がします。

そういう学生と話をしていると思うのは、日本文学科の学生であっても、授業で取り上げた作品以外はほとんど読んでいないですね。ほとんど自分で積極的に読んだという経験は、あまりないのです。

それからもう一つは、卒業論文の最近の傾向ですけども、文学作品を正面から取り組もうという感じよりも、わりに

絵と関係のある作品を取り上げたいとか、あるいは文化史的な問題をやりたいと答える学生が多いのですね。例えば近世でいえば黄表紙という絵本がありますが、そういうものをやりたいとか、あるいは江戸の遊女の生活を調べてみたいとか、あるいは近世の江戸の庶民の笑いについて卒業論文でやってみたいとか、わりと文化史的な方面に関心を示すという傾向がどうもあるような気がします。

仮に文学作品を取り上げる学生がいたにしても、これは圧倒的に、あらすじのある小説系ですね。これをやりたいという学生が多いと思います。残念ながら、和歌や俳諧、ましてや漢詩文をやるという奇特な学生はほとんどいないですね。結局、筋を追っていくのは好きだけれども、言葉の一語一語に込められた意味とか、あるいはそこに込められた思いとか、そういうものを読み解いていくというのは、あまり得意ではない、好みではないですね。どうもそういう傾向が最近あるように思います。

その原因はいろいろあって、単純な原因ではないと思いますけれども、一つは言葉ですね。日本語の言葉に対する感性・感覚といいますが、そういうものがかなり鈍くなっているのかなと。だから音楽とか絵というものに対する感性は、たぶん昔よりも鋭くなっているのでしょうか。言葉に関しては、どうもそこがいまひとつ鈍くなっているのかなという、これは印象ですが、そんな感じがしています。

○半藤 「言葉」といいますと、私や近藤先生の専門になるわけですが、このところ書店に行きますと、「声」を出して読みたい日本語」とか『問題な日本語』とか、そういう本がよく売れているということで、世間では日本語ブームということも言われております。こういう社会状況を近藤先生はどのようにご覧になっていますか。

○近藤 私はとてもそれはいいことだと思うのですね。というのは、研究をするには、まず関心を持つ層が必要ですが、関心を持つ層がいなければ、そもそも研究者養成も何もないわけですね。ですから、そういう点で日本語ブームなり何なりというのは、非常にいいことだと思いますが、そのことを含めて、ちょっと申し上げます。

先ほど、鈴木先生がおっしゃった日本語研究、日本文学研究を大学で行う意義ということですね。それと今のお話とちよつとつながるんですけども。もともと明治時代には日本語研究、国語研究というのは国策でした。つまり、国語というものを統一して、それによって国家を統一していくという、日本の国のアイデンティティー自体が国語学として、それから民族文学を形成していくということの上にあつたわけですから、その当時の国語国文学は実学そのものだったわけです。

国語に関して言えば戦後も同じで、民主化という中において、当用漢字をつくるとか、あるいは仮名遣いを変えるというのは、これは国策であつて、そのための基礎学問として日本語学が必須だったわけですね。そういうモチベーションがなくなった現在において、日本語日本文学がどういふものであるべきかということでもだえているというのが、現状ではないかと思ひます。

ですから、そこでどのように私たちの研究を提示して、世の中と一緒にあげていくか再構築する。そういうことが必要だと思ひますが、それについて、この日本語ブームも私は一つのきっかけになるだろうと思ひます。

文学方面でいうと、最近『人間失格』が非常に売れているという話がありますが、なぜ売れているかというところ、表紙を変えただけです。表紙を実は『DEATH NOTE』（デスノート）の「L」を起用しました。といつても、ご存じない方は分からないかもしれませんが。要するに、漫画のように表紙を現代風に変えただけです。それからドストエフスキーが新しい訳になつて非常に売れるというところがある。決して文学に対する興味がなくなつたわけではないのですね。ですから、そのところで新たな目標を、研究者、そして新しい研究を目指す人たちが構築していくということがこれから必要であると。

そのような中で日本語ブームは非常にいいことだと思います。

○半藤 本学の日本語日本文学科の学生の中には、日本語に対する興味、関心のある者がかなりいるわけで、例えば、それは日本語教育を勉強したいという学生数が多いということにも表れているわけですが、日本語教育を勉強したいという、そういう関心は今後も続くのでしょうか。山田先生、いかがでしょうか。

○山田 私は教養で中国語の授業も担当しているのですが、文学部の学生、特に日本語日本文学科の学生は、第二外国語はほとんど中国語と韓国語を選択しています。先だって、四年生の卒業判定の成績の審査がありましたけれども、第二外国語は何を取っているのかなとずっと見たのですが、かなりのところが中国語と韓国語でした。

中国語に関しては、ここに至って、いろいろと食品問題等で揺れていますので、たぶんこれが来年度四月の第二外国語の履修希望に大きく影響するのではないのかなと思っています。結構、第二外国語の履修というのは、そういう要素が大きいですね。サッカーのワールドカップをやったとか、韓国で何があったとか、一、三カ月前に起きた状況というのは非常に大きく影響するものですから、ちょっと不安要素でもあります。しかし、なんだかんだ、そういう波はあるのですが、特に日本語日本文学の学生の場合には中国語と韓国語に対する関心というのは恒常的に高いものがあると思います。

これはいろんな理由がもちろんあるかと思いますが、九州という場所から考えると、比較的近い外国であるということと、ここ数年、いろんなメディアでこの二つの国、特に韓国はここ数年の取り上げ方は大きいですから、韓国語履修希望の勢いもどんどん伸びてきている状況になっています。中国語に関しては、これは文学部の学生だけではなくて、全学的に言えることでしょうけれども、漢字を使っていますから勉強しやすいのではないかと誤解して履修をする学生が多いの

ではないかと思えます。いずれにしろ関心は非常に高いと思えますね。

今、半藤先生がおっしゃった日本語教育というところで言うならば、本学の日本語教育課程では中国と韓国に語学の実習というかたちで短い期間ですけれども、実際に赴いて、中国人・韓国人の学生相手に日本語をどのように教えるのかを実習をする機会があります。私は日本語教育はまったく素人ですけれども、素人なりに見ますと、非常に魅力的です。魅力的であるというのは、例えば、私は中国語を教えていて、私にとつて中国語はもちろん外国語ですから、あくまでも外国語として勉強して教えていますので、一定のところまで限度があるのですね。中国人の先生にももちろん中国語の授業を教えてもっています。彼らはいいなと、ネイティブですと、自分の言葉で教えられるのだと、分からないことは何も無いな、と思うわけですね。そんなことはもちろんないのですけれども。

結局その裏返しで、日本人が日本語で外国人に日本語を教えることができる。自分の言葉を教えることができるという、それは非常に一つの魅力的な活動というのでしょうか、行為だろうと思えますね。それは逆に言えば非常に難しいことではあるのですが、普段、それほど日本語を意識していませんから。ですから、それをある一定のカリキュラムで勉強したうえで、きちんとノウハウを得て、それを外国人に日本語を教えることができる技術を身につけるということは、非常に魅力的なやり方だろうと思うのですね。そういった意味で、中国語・韓国語への関心、興味が高いということも含めて、本学に限ってということにもなるのかもしれませんが、日本語教育に関する関心は、しばらくは続くのではないかなと思います。

毎年、新入生が入った四月の段階で、プレゼミナールという授業がありますが、大学に入ってから何をやっていったらいいのかということ、わりと早い段階で学生といろいろ話をする授業があるのですけれども、毎年一クラス一〇人ほどですが、私は学生に対して、「この大学で何を勉強したいのですか」と聞きます。日文の学生の場合は「日本語教

育に関心があります」という学生が、四月の段階ですけれども、かなりの数の学生がそういうことを言うのは事実だと思います。

○近藤 ちょうどいい機会なので、一つ質問ですが、私どもの大学院も日本語教育をやっているのですけれども、こちらだと今のお話にあったように、地の利からして、中国・韓国を対象とした日本語教育というのは非常に魅力的じゃないかと思つて伺つたのですね。というのは、やはりこれから中国語というのは、二一世紀に非常に重要な言語になるだろうと、というのは間違いないですね。

逸話なのですが、ジム・ロジャーズという非常に有名な投資家がいるのですが、その人は自分の子どもたちは全員家庭教師を付けて、中国語を学ばせたのですね。もう中国語はほとんどできる、当然しゃべれるようにしている。それは要するに、自分の子どもに対する投資だというのですね。それぐらい世界的に見ると、中国語に対する注目は本当に強いと思うのですね。ですから、今のお話を聞いて、本当にここは地の利があるから、素晴らしいことではないかなと思つたと思います。

○山田 さつきもちょっと話をしましたが、数年前に私のところで卒論を書いて卒業して、肥後銀行に就職した学生がいるのですけれども、当初は別にただ銀行に就職をしたということなのですが、肥後銀行の支店が上海にあるのですか、その仕事のいろいろなプロジェクトをつくって、学生のときに中国語をやっていたということに入れてもらえることになりました、という連絡をもらったことがあります。彼女は、学生時代から非常によく中国語の勉強をしていて、特に何かこれといった狙いがあったわけではなくて、本当に中国語が好きで、非常によく努力をしていたのですね。その結果がた

またまそういう話があったときに生かすことができ、中国に行ったり来たりしているのですね。上海も福岡から一時間で飛行機で行けますから、非常に熊本は中国に近い。日帰りが十分できる距離ですので、そういう利点も大いにかかわっているのではないかと思います。

○半藤 日本語は、コミュニケーション、それ自体を成立させるものですから、日本語学はやはり実用的な側面が強いところもあるわけですね。そういう点からすると、日本文学は、非常に悩ましいところもあるのではないかと。例えば万能細胞というトピックが話題ですが、人生を豊かにする、また、人生に貢献するテクノロジーはどんどん新しくなっている。むしろ、新しくなっていないかなければ、その学問は進歩しているとは言えないし、発展もない。しかし、日本文学研究というのは、どんどん新しく次から次へと未知なるものが明らかになっていくという生産性は薄い。その研究分野というのは、やはり古いところを十分に意識しながら新しいものへ進むという揺動が必要だろうと私は思うわけです。学生の勉強を見ていると、古いものへの回顧意識が少し薄い。昔の有名な論文を読むことよりは、新しく出た論文から自身の理屈をつくりたがる、そんなところがあるかなという感じもするのですが。

○鈴木 当然のことながら、古いものがすべて簡単に価値を封印させて、消えていくべきたぐいのものかどうかというのは、これは自然の科学の場合と大きく違いますので、何度でも何度でも人文科学においては揺り戻しで過去の業績に立ち返っていくということが頻繁に起こるわけです。

現状として、それがなかなかそういつていないと見える一つの原因は、一番最初のところでも少しお話ししましたけれども、研究の現状として、やはりどんどん新しいものも生み出していないといけないという切迫感の中から、どうして

も研究そのものがたこつば化していくわけです。結局、全体の脈絡が見えないままに、ともかく新しいものを紹介しました、新しいものを示してみましたというかたちで、バランスよく過去の遺産を系統だつて咀嚼していく時間がなくなりつつあるのではないだろうか。そのところに単純に古いものを捨てて顧みないという話ではなくて、やはり今研究の置かれている現状が与えている影響、それが結構あるのではないかという気がしております。

○半藤 揖斐先生、総じてでも近世の分野でもかまいませんが、日本文学研究の質というようなものの変化はお感じになりますでしょうか。

○揖斐 学部生レベルの問題と大学院生レベルの問題は、必ずしも一緒ではないと思うのですけれども、基本的に学部生レベルの問題でいえば、今新しいものは見るけれども、古いものは見ないというお話がありましたけれども、新しいものもあまり見ないのではないかと。つまりマニュアル化と省エネ化といえますか、そういうものがかなり進んでいるような気がするのですね。

例えば演習などで、ある作品を取り上げた場合、長い作品であれば、ある部分部分、分担して学生が発表するわけですが、基本的な参考書、注釈書を見ても、自分の担当部分だけしか見ない、全体を見ないことが起きがちですね。それでは困るから、全体を見る目を養うために、部分的な分担ではなくて、短い作品を一作品ずつ分担させて演習をやらせようとする、概説的な発表にしかないわけです。たぶん、それは省エネ化しているのか、マニュアル化しているのか分かりませんが、どうもそこで、そういう現象が学部生レベルでは起きているような、私が勤めているところは、そういう気がします。ここではどうか分かりませんが、私もそうです。

そういう問題と、あと一つは研究業績を踏まえることが研究を活性化させるかという問題ですけれども、私はちょっと違うと実は考えています。日本文学研究が何となく社会的な認知といえますか、評価といえますか、そういう点においてかつてに比べれば、なかなか厳しい局面に立たされているという感じを抱いています。それはたぶん、それにかかわっている人間は何となくみんな感じていると思うのですけれども、そのことの原因は、いわゆる文学という概念のとらえ方が古くなっているのではないのかなと実は思っています。かつての文学研究というのは、要するに文学作品ですね。小説であるとか、詩歌であるとか、そういうものを取り上げて分析をして研究をしていくというのが、文学研究が基本的にやってきたことだと思っております。

ところが文学という概念が最近かなり揺らいでいると思うのですね。小説が文学の中心でいいのか。小説だけを見ていれば文学を見ていると言えるのか。もともと文学という言葉自身が言語表現の文(あや)ですね。言語表現の文様、模様、在り方。それを研究するのが文学研究であるわけです。いわゆる文学作品に限定をしすぎて、それがかなり通用しなくなっているのではないかと思うのですね。

例えば、絵画的なものにしても、音楽にしても、根底には言語的なものがかかわっているはずなのです。従って、文学研究というものをあまり狭く考えずに、言語表現の学問であると広げていって、例えば歴史的な著作であるとか、あるいは思想的な著作であるとか、そういうものも文学研究の対象に広げていくことが文学研究というものを活性化していく一つの筋道になるのではないかなと思っております。そうしないと、いつまでも小説でもないだろうみたいな言葉に対抗できなくなってしまうと思うのですね。そうではなくて、文学研究というのは、人間の文化活動の基本的な根底を成している言語表現を研究するのだと。そのことによって、人間の在り方というものを明らかにしていくことが文学研究なのだというふうに広げていくという、文学概念の転換といえますか、それを目指していかないと、ちょっと活性化というのは難しい

のではないかと個人的には思っています。

○半藤 文学研究が今後どうあるべきかという未来の構想が示されたようなお話だと伺いました。そろそろ前半をまとめたいと思いますけれども、学問が未来に向かって発展していくためには、過去を総括し、未来を構想していくことが不可欠であり、最重要かと思えます。先生方として、これまでをどう総括し、またどういう構想に歩むべきか。そのあたり、ご意見ありましたら伺いたいと思います。

○川平 過去の総括ということと言えますと、さつき揖斐先生が言われたような新しい文学概念の創出、これはもちろん大事なことだし、ある程度、学会レベル、研究者レベルでは、すでにそういう意識は共有できているのではないかと思います。それが世間的に、日本語日本文学といったときに、思想とか、芸術とか、歴史とか、そういったものまでも含めたものなのだという認知ができていくかというところ、これはかなり危ういと思います。基本的にはやはり、文学部といったら「名作」をほとんど読んでいるだけではないかというイメージがあるのではないかと思います。なので、われわれの最先端の状況をやはり還元していく、分かりやすく世間に向かって発信し、世間のコンセンサスを得ながらやっていかないと、これは成り立っていかないと思います。

文学研究が未来に必要なかという問題でいきますと、先ほどの話でもありましたが、万能細胞などが今見つかりました。それは完全に未来に向かって、非常に希望が持てるような話題ですけれども、結局それをいざ活用しようということになると、生命倫理の問題ということが出てくるし、その生命倫理、倫理とは何かということを考えていくと、その周辺にある文学的なものなり、哲学的なものなりというものがかわってくるわけですね。つまり未来に向かっていっても、結局

足元とか過去を振り返って、そこをしつかり見なければ、前を向けないのではないかと。そういうしつかりした過去の位置づけがあるからこそ、未来にも向かっていけるのではなからうかと思えますので、やはりそういうこともきちんと世間に向かつて説明しながらやっていく必要があるかと思っています。

○半藤 結局、各人それぞれが持っている日本語日本文学に対する思い、これには尊いものがあるわけですが、それだけで完結してはよくないということでしょうか。時代とか、社会性とか、自分のまわりを見回しながら、そういうものを意識しながら研究をとらえる視野の広さというものが必要なのだと感じたしだいです。

これを前半のまとめといたしまして、一〇分間の休憩を取りたいと思います。

## ■第二部 「博士課程の使命と課題」

○半藤 第二部を始めさせていただきます。第一部では、日本語あるいは日本文学の研究、それに携わる者たちがさまざまな思いを抱えながら、この分野の研究を進めていることが浮かびあがってきたところかと思えます。悩みなく物事がスムーズに進むことは理想的かもしれませんが、しかし悩みを抱えながら、試行錯誤しながら物事が進んでいくというのも、まさに人間世界の営みという感じもいたします。この第二部では、本学に新年度から博士課程が開設されますので、教育面にスポットを当てながら議論していきたいと思えます。休憩の間に会場の方々から多数のご質問を頂戴いたしました。全てを取り上げてお話ししたいところですが、時間の都合もございますので、こちらで選択して取り上げます。先生方の人柄をあぶりだすようなことができればと思います。

まず質問の一つ目です。文学部あるいは日本語日本文学科には女子生徒が多いのですが、研究者には男性が多い。その理由は何かということですが。揖斐先生。

○揖斐 たまたま、この日本文学科の先生方はみなさん男性のようですが、必ずしも、今はすべての大学でそうではないと思います。女性の教員もずいぶん増えて、特に文学部は増えてきていて、私が見渡すところ、女性のほうが優秀な方が多いですね。そんな感じがしております。

それから、少し前まで日本古典文学会という、日本古典文学の普及を目的とする財団法人があつたのですけれども、今は低金利政策による資金難でなくなつたのですが、そこで毎年、日本古典文学会賞という賞を三五歳以下の研究者に出すということをやっていました。私はしばらくの間その賞の選考委員をやっていたのですが、最後の一〇年ぐらいは比重からいうと、男性の研究者よりも女性の研究者の方のほうで、受賞者はたぶん多かつたと思います。かつては確かに男性のほうが研究者になりやすいという社会的なものがあつたのかもしれませんが、もうこの一〇年ぐらいは、そんなことはないのではないか、逆かもしれないとも思っています。

○近藤 私も今後は変わつてくると思いますが、ジェンダーの問題はそれ自身が文学研究と非常に密着したものでして、そのことを考えること自体が実は文学研究になるというほどのものですから、ご自分で考えていただきましょうということになると思います。

ちなみに、うちは家内がやはり大学教員をやっております、家ではそういう話で盛り上がっておりますので、非常にそういう点からすると、いつも家では論じている話題ですが、今日は皆さんに考えてくださいということ、ご理解くだ

さい。

○半藤 別の質問です。これから研究するといっても、ほとんど今までの研究者たちが研究してしまっているのではないかと思います。これからの私たちがすることはあるのでしょうか。学生からの質問です。鈴木先生。

○鈴木 最後の話題ともかわると思うのですが、予想されている以上に、まだまだ課題というのはいくらでも掘り返せば掘り返すだけ問題は出てくるし、アプローチの仕方、対象とする素材、これは固定的なものではなくて、どんどん変動しつつありますので、そういう意味からするならば、研究すべきことはそんな簡単に片付いているということではなからうと思います。

ただ、古代あたりについては、文献そのものが限られておりますので、ある程度、斬新なアプローチを持っていかないと、やることがないというふうに見える可能性はあるかと思いますが、中世以降に関していうならば、もう素材そのものが無限に拡大しつつある状況の中では、やることは限りなくまだあるというのが現状だと私は理解しております。

○山田 先ほどの話ともつながるかと思いますが、私は個人的には人文学の研究というのは、基本的にある種の解釈の学問だと思っています。解釈というのは、その解釈がなされた時代とか社会的な背景とかの影響下にありますから、それが変われば当然解釈の仕方も変わってくるわけですね。ですから、同じ作品に対しても、いろんな解釈の可能性というのは無限にあり得るのではないかなと思います。

ですから、先ほど言った古い研究をどう扱うかという問題もたぶんそこにつながってくるのではないかと思うのですね。

これから研究者を目指す方は、解釈の際、社会的な背景とか、時代的な背景という要素と、更にそれとは別のところで、作品にどれだけ入っていくことができるかという、もう少しぶれのないところで作品を読み込んでいく技術というのでしょうか、能力というのでしょうか、そういったところを養っていくということに少し力を注いで、解釈の問題に対処していくことが必要ではないかなと思います。

○川平 私は江戸時代ですけれども、江戸時代の文献というのは、まだまだ見つからないものもたくさんあります。例えば、国文学研究資料館というところが出している、「日本古典籍総合目録」というのがあります。これは明治以前の本の、いろんなタイトルと所蔵先が書かれていますのですけれども、それを見ますと、四十五万冊ぐらいのタイトルがあります。もちろんこれは全部、読んで面白い作品ではありません。けれども、それだけのタイトルが登録されている。かつ、それは本当に氷山の一角です。これからもっと面白い、いい資料が出てくる可能性もあると思いますし、もちろんそれだけ待っているわけにはいきませんから、今まで知られている作品も研究対象にしなればなりません、それでも新たな切り口の読み込みは当然あり得ると思いますので、そういう心配は本当にご無用だと思います。

○半藤 川平先生への質問がきているので、もう一つお答えいただけますか。川平先生が言われたように、文学研究が世間と交渉を持っている、あるいは社会に発信していくということは、文学の発展の上で大事なことだと思います。その具体的な方法についてお聞かせいただきたい、ということですか。

○川平 一つはもうすでに、われわれの文学部がやっている試みとして、ご存じの方も多いかと思いますが、『文彩』と

いうジャーナルを出しています。それはわれわれが論文として書くような内容を、もっと一般の人にも、高校生にも分かるような内容、言葉で、分かりやすく二〇枚ぐらいにまとめた雑誌です。まずはそういうところから最先端の研究を一般にも分かる言葉で考えて、世間にしらしめるといいですか、そういうやり方というのが、まず一つはあると思います。

それから、もっと大きなところでいえば、やはり新聞、あるいはマスコミ関係ですね。テレビとかで、やはり最先端の研究成果というものが還元されなければいけないと思っています。これまでそういう努力が、われわれの先輩方には非常に薄かったのではなからうかと私は思っています。もっとそれは、どんどんやはり出していくべきではなからうかと思っています。

○半藤 本年は源氏物語千年紀ということで、文学者から多くの発信もなされております。今、まさに川平先生が言われた状況にあり、さまざま取り組みが多くなってきました。

次の質問は、揖斐先生、近藤先生へのものです。先生方が九州のある都市の大学に三年間赴任することになった場合、なぜ三年間なのかわかりませんが、三年間赴任することになった場合、ご研究の方向性が現在と変わるといえることがありますか、ということですか。

○揖斐 難しい問題ですね。確かに、年齢があると思うのですね。まだ自分の研究の方向性はつきり固まらない、これから自分の基礎を固めていくというときには、勤務地によって、つまり研究情報の問題だと思えますが、自分の研究するための情報が入りやすいところにいたいですね。いたほうが便利だということはあると思います。

ただ、ある程度、研究の方向性が固まっていれば、今いろいろ情報の取り方も多様化していますし、先ほど、中国関係

でもパソコンでおっしゃっていましたが、パソコンを使えば、かなりいろんな情報が取れるようになっていきますので、必ずしもそれは方向性を変えなくてもやっていけるだろうと。

逆に先ほどの川平先生のお話とは、ちよつとあれするかもしれないませんが、研究者というのは、いろんなところで忙しくなると、つまらないことに時間を使うようになるのですね。やはり自分の本当にやりたい研究を深めるといいますか、まとめるといいますか、そういうときには、ある程度、落ち着いた研究環境みたいなものが必要な時期もあります。それはやはり研究者の年齢とか、時期とか、そういうものによつて、プラスの場合もあるし、マイナスの場合もあると思います。

○近藤 私に関していえば、先ほど申しました、私の研究はコンピュータを使って日本語研究をすることなので、コンピュータのリソースというのは、今インターネット上で自由に取られますから、どこにいても、日本にいようと、アラスカにいようと関係なしに仕事はできます。ディスクの内容も大学のコンピュータに直結して、自宅からもどこからでも同じようにできますから、全然関係ありません。ですから、私が今熊本に二、三年間来ても、今の研究をそっくりそのまま、東京にあるディスクを遠隔で見るのは簡単ですから、全然変わりなくできます。

むしろ、私が申し上げたいのは、実はそれは大学にいらなくてもできることなのです。では、大学にいらつたのは一体どういうことなのかという、実はそれが問われています、特にアメリカの研究データ、コンピュータサイエンスのデータはものすごい量のものが自由に、大学の外からいくらでも見られるのです。ですから、今の質問をさらに考えると、なぜ大学の先生をやっているのですかと、なぜ大学院でなければ研究できないのですかということに実はつながると私は思っています。そのことについては、ちよつとまた話を。

○半藤 近藤先生には、コンピュータを使った研究ということ、具体的な例を挙げて、どのようなことをするのか教えていただきたいという質問が来ています。何か事例があればいいのでしたら、お答えいただきたいのですが。

○近藤 例えば、ごく簡単な例で言いますと、私は今、新しく書いた論文を手元に持ってきたのですけれども、私が一番気に入っている論文は「平安助詞の接続助詞「て」の機能」というのですが、接続助詞は実は二種類あるんですね。例えば現代語でいうと、「持って歩く」みたいなのは、わりとくっついていきますね。それに対して「朝起きて学校に行った」「て」というのは離れていますね。つまり、時間的な継時的関係。それに対して「持って歩く」の「て」というのは、同じ時に起きていますね。持ちながら歩くということ。

このように、現代の「て」は二種類ですけれども、実は平安時代も二種類あるのではないかと思って調べてみたのですが、これをやるときに、頭から最後まで『源氏物語』を読んでいたのでは時間がかかってしょうがないですから、『源氏物語』のテキストデータを使って「て」の部分をとって検索すると、実はその二種類の「て」で文法が違うんですね。「持って帰る」みたいなときは、「持ちてのみ帰る」というふうには、「て」の次に副助詞が来られます。ところが、「明け方になりて、宮帰りたまふ」みたいなときは、「明け方になりてのみ、宮帰りたまふ」のように、副助詞が来ることは絶対にはないです。そんなことはコンピュータで一発で分かる。でも、コンピュータを使わないと大変なのです。こういうことを一度ぱっと調べたら、では副助詞だったら、どんなものがそうかしらとか、係助詞はどうかしらということは、瞬時に二、三秒でできるわけですね。そんな感じですよ。

○半藤 科学技術の進歩が日本語研究にも多大な恩恵をもたらしていることがお分かりいただけただけかと思えます。

あと二つ取り上げます。これはなかなか答えが難しいかもしれませんが、同様に文学や語学研究においては、これという一つの答えがないように思われます。そんな中で、先生方は学生の指導を行われていると思うのですが、答えがないということの難しさや面白さなど、何か日ごろ感じられていることはおありでしょうか、というものです。算数の試験ですと、これと答えが出るのですけれども、国語はあれもこれも言えるな、ということですね。文学や語学研究も、これという答えが見つけにくいのではないかとありますが、そんな中で、先生方ほどのように指導されているのかということですが、お一方ずつお願いできますか。

○揖斐 非常に難しいですね。答えがないといえはないけれども、でもその答えがないというなかには、ある枠があつて、その枠の中で、いくとおりかの答えがあり得るということだろうと思うのですね。何でもかんでも自分が思ったとおりで考えれば、それでいいのだというものはなくて、それは言葉の使い方の問題であるとか、何とか基本的な問題を踏まえて、ある枠の中でいくつかの複数の考えがあつたときに、どちらが自分にとってはいいのかと、たぶんそういうことだろうと思います。

むしろ、教育の現場で学生たちと向き合つて思うのは、高校までは要する正解を求められて、正解を答えるという習慣といえますか、そういう風に訓練されている学生をいかにして、文学研究というのは必ずしも「正解」を求めるためのものではないんだよということですね。高等学校で、これは正解だと言われたものも、実は研究の積み重ねの中で、そういうふうになっているだけであつて、別の見方をすれば、こういう考え方だつてあるのだよという、それを学生に分かつてもらうことが、たぶん大学で日本文学を教えるときの一番最初の大きな問題なのですね。そのことを例えば講義などで、この部分にはこういう説もあり、こういう説もあるという、そういう説を並べていってということもあるのですが、一番

やはり効果的なのは、学生に考えさせて、学生に意見を言わせて、それをあり得るならばあり得る、どうしてもそれは無理だったら、この点が無理だということかたちで、学生が答えたものに対して指摘をしていくといえますか、一緒に考えていくという、たぶんそういうことが大学の文学研究の教室の場での第一歩だと思っていまして、それをやっているつもりです。

ただそれは、実は教員にとつては非常につらいことで、教員がきちんと勉強していないとそうは言えないですね。あらかじめ一つの答えだけなら、それで通せばいいけれども、学生は何を言うか分かりませんから、その学生が言っていることが何なのかということ、こちらはちゃんと整理をして、そこに合理性とか妥当性があれば、その部分は確かに合理的だねとか、あり得るねということかたちで指摘をしていって、一緒に考えていくということが、たぶん文学を考える第一歩だろうと思います。

○近藤 たぶん、どんな分野でも一つしか答えがないということはないかと思えます。例えば、自然科学でいても、ある一つの化合物をつくるのに、複数の方法があるとか、そういうことは当然あるだろうし、数学でいえばやり方が全然違う解法、統計的にやる方法と数理的にやる方法があったりするでしょうから、それだったら、どの分野でも変わらないだろうと私は思います。

だから私の感じでは、どこに問題があるかを突き止める能力があれば、どの分野でも学者はやっていきえると思っておりますので、学生に対して一番私が気をつけているのは、どこに問題があるかを自分で発見する能力を、大学のうち、特に大学院のうちに身につけるようにということ、それでいいのではないかなと思っております。

○鈴木 私は高校で一三年ぐらい、非常勤で教えたことがあります。そういうところで国語の授業をやっていると、特に現代文のときによく起こることですけれども、答案を返すときに、これはほかの考え方があっていいのかもしれないこと、で、そのところをどう理解すべきなのかというところが、いざ試験を前にしたときに、鮮明に教えている側と教えられている側とが対立することが起こるわけです。

そういうときに、これは教える側の技術として、よく言っていたわけですが、確かに一見、解釈というのは十人いれば十通りあるように見えるわけですが、現実問題として、無限に多様な解釈というのは、通常はあり得ないわけですね。もし、例えば授業で行った解釈に対して反論があるのならば、それはその授業の中で、いや、こういう解釈のほうが妥当ではないのかということで、やはり反論を出すべきだろうと思います。その反論も、教えている側との対決の中で、おのずとある一定の集約点のなかには、必ず落ち着くだろうと思います。十人いるからといって、十通りのまったく違った解釈が出てくるというのは、よほどこれは特殊な事例であって、それはそもそもその集約を求めること自体がおかしなようにつくられたテキストでしょう。通常はやはり合理的な根拠のもとに、まず前後の文脈を読んでくださいよ、このところ、こういうふうに描いて、そしてこれが伏線になって、このような展開になっていく中で、これはやはりこう読むべきでしょうという議論をつくしていけば、まず作品というのは、ある程度の共通の合意の中へ落ち着くように、通常はつくられているものだろうと思います。

ですから、それ以上に解釈を一元化する必要はないわけですが、かつて、近代の文学の中でも、解釈のアナキズムといって、どのような解釈でも実はあり得るのだというような、かなり無謀な議論が出てきたことがあるわけですが、実際問題には共通の認識を求めて議論を重ねていくならば、おのずと一定の範囲の中には収まるべきものだろうというイメージを抱いております。

○山田 私の場合は授業レベルで申しますと、解釈は授業の準備までに、何が何でも自分の解釈を一つ用意していくというのが基本的な姿勢ですけれども、どうしてもできない場合というのがありますね。そういう場合は、私はわりと能がないものですから、授業中、学生相手に対して、ここは二説併置、併用ということで、しばらく我慢してくださいということを言います。また、私の解釈に対して、優秀な学生が「そうではなくて、こうじゃないですか」ということを授業中に言う場合がありますね。それが本場に再考の価値のあるものであれば、そこで考えるわけですが、考えて、やはり私の解釈がいいのか、学生の解釈がいいのかで迷う場合があります。その場合、二説併置と私のほうが言います。

その場合、二説併置にしたものが、次の授業のときまでに結論が出る場合がもちろんありますが、それは帰ってから、次の週一週間の間に考えますよね。出た場合はもちろんそれを紹介します。ただ、そうではなくて、「二説併置でしばらく我慢してください」と授業中に言っ、五分ほどしたときに、すんとこれが分かる場合があるのですね。これが実はものすごい快感で、さっきまで何も分からなかった、どちらが正しいか分からなかったのが、何かの拍子にすんと腑に落ちるといのでしょうか、それをそのまま、また学生に伝える。なぜ、さっきまではこの二説併置でしか考えられなかったのに、なぜ急にそれが間違いないくちらであるということが分かるようになったのか。私の中で変化があるわけですけども、それをそのまま、これもまた能がないので、ぱっと学生に伝えるのですね。

解釈するのはどういうことかとか、解釈に悩むのはどういうことなのかということ、そのまま学生に伝えることができるのかなと思うのですけれども、それはそうしょっちゅうあることではなくて、多くの場合は二説併置ですね。

一回それで、私は失敗しことがあるのですけれども、中国の大学で授業を一回やったことがあります、中国の学生は本当によく質問をするのですね。同じようにやはり二説併置をやったことがあったのですが、そのあとで私を呼んでくれ

た中国の大学の先生に呼ばれて、「あれはいかん」と。中国の学生は質問をよく先生にするけれども、質問を先生にして、必ず一つの回答を先生からもらうことを期待している。もらつて、自分の中の問題を解決して家に帰ると。それが彼らの質問の意図なので、中国の大学では二説併置をやつてはいけませんということ、後で厳しく言われたことがあります。どうも中国はそういうことをやつてゐるみたいですが、日本の大学では、私は二説併置というかたちをよくとつてゐます。

○川平 難しい問題で、皆さんが言われたことと大体重なるようなことしか言えませんけれども。やはり数学のように一つの答えがぼんと出るのはなくて、文学の問題というのはいろんな解釈があると思ひますけれども、みんなが納得できる、論理の隙がない、まあ、そつだよねという、その点というのは、やはり限られて、おのずから一つに絞られてくるのではないかと思ひます。

ですから、それをやるためには、きちんとした論証、こうだからこうなのだという、その点をきちんと教えることができればいいのではなからうかと思ひます。こういう手続きをとつて、だからこういう考えにしかならないんだ。それが一番、蓋然性が高いのだという、その手続きそのものに非常に意義があると思ひますので。もちろん結果は覆されることもあり得るけれども、現時点での論理的な手続きをとつた結果がこれであると。それが示せればいいのではないかと私は思つてゐます。

○半藤 最後の質問といたしますけれども、これは鈴木先生、山田先生、川平先生に願ひするものだろうと思ひます。

本学文学部は、創立以来の伝統と歴史を持ちますが、現在の文学部の教員スタッフに本学出身者がいらつしやらないのを残念に思つてゐます。博士課程開設に際し、本学の教員として将来を担うような人材育成をぜひ考えていただければと

願っております。この点に関してのビジョンなり、構想なり、お聞かせ願えればありがたい、ということです。本学の先生方のご決意なり、ご覚悟なり、そのあたり、お話しいただきたく思います。

○鈴木 本学としても研究者養成ということをはっきりとビジョンの中に持つようになったのは、まさしく博士後期課程の設置からなるだろう、もしくは、もう少し広くとるならば、修士課程設置のところから、そのことはわれわれも念頭に置かなければいけなかつただろうと思います。

ただ、これにはやはり二通りの考え方があろうかと思えます。一つには、例えば一部の私立の大学がそうですけれども、意識的に自分の大学の出身者はあえて取らない。それをスタンスとして打ち出すところもないわけではない。それがいいのか悪いのか、いろいろな考え方があろうかと思えます。

これは私の個人的な考え方ですけれども、長期的にはやはり本学へ戻ってきて、そして長期的なビジョンのもとに本学で研究、教育を務めてくれる人材を、やはりこれは育成していかなければいけない。それでこそ研究者養成のシステムとして、博士後期課程を設置したことの意味にはなろうかと思えます。やはりいずれはここへ戻ってきて、勤めてくれるような方をきちんと養成していかなければいけないだろうかと思えます。しかし、自家中毒に陥ることもやはり私は避けるべきだろうと思えますので、一定の枠の中ではあろうかと思えますが、そのようなことを考えています。

○山田 自分の大学出身者を教員として将来的に採用するかどうかということに関しては、鈴木先生が今まとめてくださったようなことに尽きるのではないかなと思います。また、研究者養成ということが、これから本学が担っていかなければいけない課題であるということもそのとおりだと思います。そのような視点で、今後どういった学生を育成していけばい

いかということに、もちろんなってくるだろうと思います。

日本語日本文学科の博士課程にかかわる場合の私のポジションとしては、日本の古典にいろいろ大きく影響を与えてきた中国の古典を、きちんと自分で読んでいくことができるような学生、研究者を育てていくということが、たぶん私の使命ではないかなと思います。中国の古典というのは、日本のいろんな時代において、相当程度の影響力がありますので、それをきちんと解釈することができる力というのは、日本文学の研究者を目指す人にとっては、大きな意味を持つてくることだと思います。

それから、私は中国に留学していたときに初めて気がついたのですが、日本文学をやられている人、あるいは和漢比較文学をやられている人、私から見れば日本文学の研究者というような位置づけをされる方々だと思うのですけれども、そういうの方が結構中国に中国語の勉強に来ているのだなということを知りました。和漢比較にしても、中国の古典をやるにしても、当然中国の研究が本場になるわけですから、そういった方面に秀でた研究者というか、学生を養っていくということが、今と広がるのではないかと思うわけです。そういった方面に秀でた研究者というか、学生を養っていくということが、今後、本学から研究者として自立していけるような人材を育成していくうえでの私の務めではないかなと考えています。

○川平 今までは博士課程がありませんでしたから、本学から研究者として巣立って行かれるという方が少なかったというところが、一つはあると思います。やはり今までは学生と先生の知識の格差というものはものすごい大きなものだから、どうやったら先生になれるのだろうかというイメージが、ほとんど湧かなかっただろうと思います。でも、修士課程があつて、博士課程の学生がいると、やはり学生と先生の間地点にいるような人たちが学内をうろちよろすることになる。そうなると、どういうステップを踏んで先生になっていくのかが見えやすくなると思いますので、イメージがしやすくなるので

はなかるうか。やはり、自分もそういう道に進もうという人がどんどん出てくるのではないかと思っておりますので、いづれ、本学出身者がここの大学の先生になるという可能性は非常に大きくあると思います。

○半藤 揖斐先生、近藤先生にも伺いたいと思います。中西進氏が『文学・語学』（全国大学国語国文学会誌）の学会創立五〇周年記念号掲載の座談会の中で、今後日本語日本文学の分野を発展させていくうえで必要なのは優秀な研究者を育てることだとおっしゃっていますが、優秀な研究者をどうやって育てていくのかという具体案について、何かお考えをお願いします。

○揖斐 あまり優秀な研究者ではないので答えづらいのですが、研究者をどのように育てるかということですが、研究者の中身といえますか、これはもちろん教員の側的確な指導、アドバイスが必要だということは当然言えるわけです。これはたぶん研究者の在り方の個人個人の問題もあると思いますが、私の自分の狭い個人的な経験でしかないかもしれませんが、基本的に大学院生というのは自分で育てていくのではないかと思っております。大学院に來られた院生を、教員がいくらしゃかりきになって、いろんなことを教えていっても、たぶんそれは研究者として、その院生が自立していけるかどうかというのとは別の問題ではないのかなと。もちろん指導は必要だけれども、それだけではたぶん自立するのは難しいのではないのかなと個人的には思っています。

それはなぜかといいますと、研究というのはもちろん努力ということがすごく必要なことだし、忍耐も必要だし、目配りも必要ですけれども、研究というのはやはりセンスだと思っておりますね。研究センスというのが私はあると思うのです。それはもちろん、その人の持っている個性的なものとかかわるものですが、センスというのは必ずしも先天的なもの

のだけでもなくて、やはりいろんな自分の専門領域以外のものへの目配りとか関心とか、そういうものも含めたセンスだろうと思います。

例えば、古典文学で『万葉集』を研究しますと言って、『万葉集』しか読まない人は、たぶん立派な『万葉集』の研究者にはなれない。やはりこれは文学全般、現代文学も含めて、文学全般に対して興味・関心を持ち、広く勉強して自分のセンスをつくっていくという、中西進さんはそういう方だと思えますけれども。そういうものがないと、研究者として成長していくことは難しいと思います。それはおそらく教員が大学院生を手取り足取り指導してできるものではなくて、それは院生自身が自覚的にそういう勉強を自分でつくっていくことだろうと思っています。

ただ、教員ができることというのは、要するに院生が努力もし、センスもある院生が自立できるように体制をつくるということだと思うのです。そこで一番大きいのはやはり就職の問題だと思います。仮に有望な人がいても、なかなか就職が難しければ、そういうものが継続できないということもありますので、やはりここでも、このたび後期課程をつくられたということで、これからたぶん先生方、非常に大変な思いをされるだろうと思います。それは学生を育てるという面でも大変だと思えますけれども、育てた学生をどのように自立させていくのかという、それを専門の仕事としていけるような体制をどうつくっていくのかということが非常に難しいといえますか、大きな仕事になってくるだろうなと思っています。

○近藤 ちよつと違った角度から申し上げます。私どもの大学も博士後期課程日本語日本文学で一〇名ぐらい持っております。やはり同じ目的でやっているのですけれども、そこで非常に問題になっているというか、一番重要なことと思うのは博士論文の指導体制ですね。博士論文を書かないことには博士後期がある意味がないわけですから、博士論文がなけれ

ば今就職も不可能ですね。ですから、そのサポート体制をいかにするか。ある程度、やはり内規のようなものをつくって、学会誌に何部書いて、どのくらいだったら博士論文を書けるだけのものになったとか。

それから、あと大学に入ったときから、すでに博士論文目指してどれぐらいのところまでやるべきかということを本人に自覚させるとか、そういう意識的・体系的な目標を学科内で構築しておくことが非常に重要だと思いますね。やはり博士後期課程を持ったからには、博士論文ということを一番重要な目標にしなければいけないだろうと思います。

そのためには、今お話したような非常に形式的な面ですね。内規面も定めるといった、そういう形式的な面と、それから演習で博士論文を書けるようなふさわしいトレーニングをすることですね。それをやはり口はばつたいですけど、先生方はすごく意識して、博士課程の演習というのは、論文を書けるだけのトレーニングであるということで特訓されるというのではないかなと思います。

やはり大学にしかできないことというのは、学位を授与することですね。これは、ほかにはできないことですから、そのところは非常に重要だなと思います。

○半藤 お話を伺っていますと、研究者を育てるということ、あるいは学部学生を育てて社会に送り出すということ、それらは同じような側面があるということでしょうか。それはどういふことかとというと、育てる側の論理、そして育つ側の意識、そういうものを上手に組み合わせていくなかで、人材養成ということがあるのかなと感じました。

研究者というのは非常におしゃべり好きなので、あつという間に時間が過ぎて、予定の時刻がまいました。最後に、先生方の熱意をぜひ会場の皆さまに受け止めていただきたいということで、熱いメッセージ、私は自分の研究分野にこんなに誇りを持っているとか、あるいは学生にはこのように向かっていって欲しいとか、会場にお越しの方々的心強く思う

ようなメッセージを、ぜひ贈っていただきたいと思います。

川平先生から、よろしく願います。

○川平 熱いメッセージを。私は江戸時代が専門ですが、江戸時代の熊本には時習館という藩校がございました。これは皆さん、ご存じかと思えます。この藩校は全国のいろんな藩校の教授として、いわば引き抜かれていくような、全国にもまれに見るくらいに充実した学校だったわけです。それが再現できないかということをお大きな目標としては持っています。つまり、ここを巢立って、いろんな大学に優秀な、第一線で活躍できる研究者が一人でも二人でも生まれてくるように、一つは願っています。

それから非常に具体的なところでいきますと、学部生に「大学院を考えないのか」と言いますと、大体皆さん、経済的な問題を一つ問題にして躊躇するのですね。しかし、お金というのはどうにかなると思うのです。簡単に言ってしまうことはできませんが、いろんな手はずがあります。学術振興会というのがありまして、その研究者として選ばれば、研究費をもらいながら院生を続けるということが出来ます。あるいは、学生支援機構の奨学金でも、成績の優秀な人には免除制度もあります。そういうものを利用することもあると思いますし、またそれに仮に受からないとしても、本当に勉強したいという気持ちがあるのであれば、借金してでも行けるのではないかと。それぐらいの覚悟がいるのではないかと思っています。

例えば、小さなお店を開こうとしても、何百万かのお金が必要で、そのように新しい人生を開こうとするときには、何らかの金銭的なリスクが当然ある。それをこの段階でやるのだと思えばよい。就職してから少しづつ返していけばいいと思いますので、そこらへんにあまり躊躇なさらないようにと思います。そのへんはまた相談を受けつつ、いろいろ

ろアドバイスしていききたいと思っています。

○山田 さっきの中国で授業をしたときの話に戻るのですけれども、中国の学生が本当にいろんなことを聞くわけですね。非常に自由に質問をするわけで、中国のことであれこれと聞いてくるわけです。一応私が学生にきちんと答えると、なるほど、ありがとうございましたと納得してくれるわけですね。それをいくつかやっているうちに、ふつと気がついたのですが、普段私は月出の文学部棟の四階のトイレ向かいの狭い研究室で本を読んでいるわけですね。本に埋もれて本を読んでいる。そこで、言ってみれば本から私は知識を得ているわけですが、その得た知識で彼らに答えるのですね。彼らはもちろん常日ごろから中国で生活しているわけです。その中で生じた疑問を私にぶつけてくるわけで、私がそれに対して答え、納得してくれる。これは何かすごいことだなと、ふとそのときに思ったのです。

中国研究も最近、やたらフィールドワークブームですぐに現地に行つて、いろんな調査をするというのがはやっていっているのですけれども、こういう言い方をすると、ちよつと批判めいた言い方になりますが、それはそれで非常に重要なことだと思つたのですけれども、必ずしもそれをやらなければ学問ができないというわけではもちろんないわけで、狭い研究室で本に埋もれて勉強して得た知識であっても、それは十分中国の大陸で日常的に生活している若者を納得させるだけの説得力のある、こうした言い方をするのであればすけれども、材料にはなるわけですね。

要するに、研究とか勉強の方法というのは、いろいろな方法があつて、一番最初に言つたデジタル化とか、今はインターネットも使えますから、いろんな情報がありますので、条件はそれぞれ異なるけれども、どんな条件にあつても、本人が一定程度の努力をした場合は、その努力は決して裏切らないだけの結果というのは、おのずとついてくるのではないのかなと思ひます。

今、川平先生がおっしゃったように、いろんな条件があつて、それぞれ研究者なり、大学院に進学したいと思つていたり、研究者になろうと思つているいろんな人の条件が違うわけですから、その人の研究できる環境というものも違つてくるだろうと思います。これは仕方ないことだと思つますが、その環境において、個々の人が払つた努力に対しては、必ずそれだけの結果がついてくるということ、実は中国で中国人相手に講義をしているときに、ふつと思つたといふか、気がついたことなので、最後それは皆さんにお伝えしたいと思います。

○鈴木 客観的な状況からするならば、決して楽観的な見通しがあるわけではもちろんないわけです。ただ、それは逆に裏返して言いますと、今どうしたら、どういう路線をとれば確実に例えば研究者で生きていけるのか、そういう路線が本来にあるのかということを考えていくならば、逆にどの大学も流動化を起こして、自分のところを出ていけば確実にちゃんと研究者を育てられますよということを保証できるところは、なくなりつつあるだろうと思つます。つまり、全国的なレベルでその流動化状態を起こし、先が見えない状態になりつつあるのだろうと思つています。

そういう中で、われわれは単純にすぐに職を保証できますよと、軽々とは口約束で言うことはできないわけですから、現状として確実にこれから一〇年ぐらいかけて世代交代が起こつていく。その世代交代の中で、当然大学の教員や研究者の世代交代も起こらざるを得ないのが厳然たる事実なわけです。その中で、つまり、ある意味では地方の大学であっても、われわれには均等に機会が与えられているのだろうと思つます。本当にやる気があつて、それに対して自分は屈しないのだという覚悟さえあるならば、おのずと道は開けるということも可能だろうと私は思つております。

われわれは最大限その中で研究体制なり、あるいは就職口なりに関して、最大限の努力を払つて、活路をちゃんと見いだすようにしていかないといけないわけですから、外面的な条件整備、こここのところに関しては、われわれは最大限

の努力を払って、あらゆる刺激を与える体制をつくりつつあると言ってよいだろうと思います。

ですから、今の先の見えない状況は、必ずしも本学だけの状況ではない。その意味では、やる気さえあるならば十分な活路が開けてくるのだろうと思います。

○近藤 今、鈴木先生がおっしゃったことにつながるところがあるので、みな先生がおっしゃるように学問体系、あるいは文学という枠組み自体が変動しつつある。これは語学研究でもそうですけれども、本当に新しい時代だと思ふのですね。これはやはりネットというものと無関係ではない。これは間違いなく関係があるのですけれども。そういう時代において、自分たちで新しい体系自身を構築できるというのは、本当に素晴らしいことだと思ふのですね。ですから、その新しい学問、この院生の先生方、本当にいい先生ばかりいらっしやいますから、ぜひここで学んで、私たちと一緒に学問を考えていくメンバーに加わってください。こういうふうに申し上げたいと思いますね。

先ほど経済的な面でなかなか難しいこともあるという話で、何とかなるということもありましたけれども、例えばこれはちよつと別の方向のメッセージですけれども、いろんな大学で博士後期課程の授業料が無料になるという大学が少しずつ出てきましたね。ですから、熊本県立大学が公立で初めて博士後期課程が無料になりましたというようなことがもしあれば、これは素晴らしいのではないかなと。これはちよつとメッセージの方向が違いましたか。そんなことで、よろしくお願ひします。

○揖斐 鈴木先生のお話だと、一〇年後には世代交代される人間ですけれども。私は昭和四一年に大学に入学しまして、大学院は昭和四六年に入りました。ちよつと紛争の時代ですね。幸せなことに、ずっと休講ばかりだったものですから、

まともに授業を受けることがなくて、大学を卒業して、それで社会に出ればよかったのですけれども、このまま出るのも嫌だなというような、そんな気持ちで大学院に行ったのです。いわゆるモラトリアム。大学院生みたいな、そういう人間です。

大学院に入った以上は何か研究テーマを決めなくてはという、そういうレベルで入っているのですけれども、そういうときに、ドイツ文学研究者の富士川英郎さんという方が、江戸時代の漢詩人について『江戸後期の詩人たち』という本をお書きになって、それをたまたま読んだのですね。それを読んで、それは全然私はそれまで知らない世界だったものから、非常に面白く読みまして、中でも柏木如亭という詩人のことが書かれていたのですが、これを読んだときに、なんて時代を隔絶した生き方をしたのでだろう、書いた詩はなんて叙情的で素晴らしいのだらうと思ひまして、これに決めたという、非常に軽率な研究テーマの選び方をしました。

江戸時代のものとはいえ漢詩文ですから漢文を読めなくてはいけないのですけれども、当時の私はほとんど漢文が読めなかったのです。高校で習った程度の読み方しかできないのですね。でも、何とかそれを勉強したい、明らかにしたいという気持ちになりました。それは、時代的にいえば二百年も前の人間だけれども、その人間に自分と同時代人といえますか、自分と同じにおいの人間といえますか、それを感じたのですね。それを何とか自分の言葉で説明したい、検証したい、これはどういう人間かということですね。たぶんそれは自分自身を検証することでもあったと思うのですけれども、そういう思いで始めました。

だから出発点は二五歳で遅かったし、大学院に入った段階でも何をやろうと決めていないような、非常にいいかげんかたちで入りました。でも、それから何とかやっていけば、今日こういうところにお招きいただいて、もっともらしいことが言えるような人間にはなったのですね。ということ、何歳から始められるということは、あまり考える必要はない

と思います。やりたいと思ったときに始めればよいと思うのですね。

もう一つは、ここであまり話に出なかつたので、最後に申し添えたいのですが、今大学にしても、あるいは大学院の修士課程にしても、いわゆる生涯学習的な役割を果たす場所として、退職された方がそこで勉強されるということがかなり一般化してきていると思います。それは実は博士後期課程でもそういう状況になりつつあって、私の勤めている大学の大学院では、今私のところに博士後期課程の学生は四人いるのですけれども、そのうちお一人は五〇代後半の女性で銀行にずっとお勤めになっていて、五〇歳過ぎたところに辞められて、やはり自分はこれをやりたいのだということで、学士入学から始まって、大学院に進学し、博士後期課程に入り、許六という芭蕉の門人の研究をしています。この許六の研究を始めたのは、やはり大学院に入ってからです。それでも今、許六の出身地の地方史の原稿を頼まれてお書きになったり、そこに呼ばれて、大学院生ですけれども、講演をしたりという所までいっています。あるいは、高校の先生を現在休職中で、やはり大学院に入って後期課程に在籍されて、日本の漢詩人を研究している四〇代後半の男性の方もいます。

あと、これはごく最近の話ですが、大正生まれの方が、大学院の後期課程を受験されるようなこともありました。大正生まれで九〇歳になろうという方も大学院後期課程に来て勉強し論文を書くという時代になっているのですね。

ですから、先ほど就職とか何とか言いましたけれども、そういう問題とは別に、やはり自分の生き方とか、生きる目的とか、自分のやりたいこと、それを追求するために、やはり大学院というのはありますし、後期課程にもそういう場として在籍しようとされる方が、これからはだんだん増えてくると思っていますので、年齢とか、もう自分は遅いのではないとかか、そういうのはあまり思う必要はないのですね。やはり、その熱意、気持ちを持って始められ、それに集中されれば何らかの成果が上げられるものだと思います。以上です。

○半藤 会場の皆さんは、五人のパネラーからのメッセージをどのように受け止められたでしょうか。「日本語日本文学研究の未来」をテーマに議論してきましたが、会場の皆さんの思いは計り知れないわけですから、ここにコーディネーターをつとめました私は、非常に良いディスカッションであったと感じております。日本語日本文学研究のバラ色の未来を高らかに語る、そういうメッセージを贈ることは、た易いことだろうと思います。しかし、われわれは、まじめに言葉を語ったのであります。「まじめ」は、若者たちは「格好悪い」というイメージも持つわけですから、まじめに語るということは言葉についてとても真剣に考えることであります。そうした言葉に対しては、誰も一生懸命聞こう、反応しようという姿勢になるものです。そのようなコミュニケーションのあり方によって、われわれの言葉の知識や、ものとの伝え方が少しずつ伝わっていくのではないかと思います。

ですから、われわれはこれからもこういう機会をつくりながら、言葉について、あまりドラマチックに面白くは語れないかもしれませんが、しかし、まじめに語っていくことを続けていこうと思っております。いつかは、狭い会場でもいいから、会場の皆さまと一緒に語り合える機会も持ちたい、多くの方々とまじめに語り合う、そんな機会をつくっていかれたらと思っております。

今回のパネルディスカッションはこれで閉じさせていただきます。ありがとうございました。

(終了)

